

中国ムスリムの末裔・バンロン人たちの声 ——雲南・ミャンマー・タイを越えて

同志社大学グローバル地域文化学部准教授 王 柳 蘭

1. はじめに—中国のムスリム（回族）と東南アジアの関わり

先程の下條さんのご報告が、ウォーターフロンティアという東南アジアの沿岸部の話でしたが、私は東南アジアの山地におけるボーダーの話をしたと思っています。この二つの写真はフィールドワークの時に撮ったものですが、ラオスのメコン河を超えたところ。向こう側がラオスで、こちらがタイ。こっちの手前がタイの北部のメーサイ、陸続きにミャンマー、かつてのビルマに続く日常の様子です。中国からリングとか運んできている様子だったり、手前は日常的に商人もミャンマーからモノを売りにきたりという状況でした。

下條さんのお話のキーワードが「混淆」ということでした。私自身、出自が「混淆」しているということもありまして、今回の発表の準備の段階から、自分自身のことも考えるきっかけになっています。今日はタイ北部とミャンマーの境界を越えたムスリムについての移住の話ですが、これまでムスリム社会や中華系の人々の社会のあり方に関心をもってきました。写真にありますように、海外に学会で行った時はカナダでムスリムの方に出会って写真を撮ったり、シーア派の寺院を訪問したり、右はオーストラ

リアのアデレードでチャイナタウンに行った時の写真です。この写真はタイの北部のチェンマイのムスリムの子どもたちです。このように、人の移動を中華系の人を軸にして、ムスリムとか、キリスト教徒とか、異なる宗教の人たちも視野に入れて調査してきました。

今日の話は中国のムスリムの人たちです。雲南省というのは中国の西南部ですが、そこからミャンマーとかタイ、時にはラオスに移動してきた人々であります。その人たちのタイにおける暮らしのあり方や、ミャンマー（1989年にビルマからミャンマーに国名が変わりましたが）、に住む中国の雲南省から来た人たちの暮らし、特にムスリムを調査してきました。この中国系のムスリムにはいろんなグループがありますが、今回は中国のなかでも、ムスリムの人口としてはもっとも大きい、中国語では回族といわれる人たちです。外見は漢民族に似ていまして、中国語を話す人たちです。雲南省は多民族が暮らす地域として知られていますが、このうちアカ族、ハニ族とか、タイにも住んでいる人たちの故郷でもあります。写真にあるように中華文明を時代の中で受容しながらイスラーム的な思想も発展させてきたという点について、歴史学者の人たちは研究してきました。さまざまな信仰に基づくグループがあります。今回はスンニ派のハナフィー学派に属するという人たちです。

今日は、先程の話にもありましたように見えないボーダー、すなわち、国と国との関係、「大きな歴史語り」の中では見えてこない地域のあり方と、そこでの人と人との関係性についてお話し

ます。とくにマイノリティの目線からみた地域の問題や関係性にもともと関心があるのですが、今回はフィールドワークで出会った人から私が聞いたお話をベースに、その調査した内容をお伝えしたいと思います。以下では、中国からビルマ、タイに渡った中国ムスリムの概況をお伝えして、その中でパンロンの人たちが、どういう生き方をしてきたか。歴史が変化する中で、自分をどのように位置づけて、故郷—それはしばしば想像されるものでもあります—とどう関係をもってきたかについて話をしたいと思います。

2. 近現代における雲南系ムスリム—戦争、交易、コミュニティ

さて、この西南中国から東南アジア大陸部の地域は植民地と内戦、冷戦が絶えず続いてきました。さきほどの下條さんがお話されたベトナムもそうですが、中国は清朝が弱体化していく中で西洋列強の進出の場になってきたことはご存じだと思います。イギリスをはじめとする西洋列強の進出と清朝の衰退の中で、中国各地で農民運動や少数民族の蜂起も起こってきました。こうして中国は大きな社会変動の時代を経験していきますが、一方でビルマがイギリスによって植民地化されます。日本も帝国主義化の中で中国を侵略します。近現代におけるさまざまな国際・国内環境のなかを今回、調査地の人たちである中国のムスリムは生き抜いてきました。さらに時代が進むと、冷戦さらに中国では共産党と国

民党の国共内戦が始まり、中華民国・台湾と中華人民共和国の二つか、一つの中国かということで現在でも議論になっています。中国と台湾というと中国の沿岸部で起こっていることのように思いますが、同時代的には東南アジア大陸部でも起こっていました。現在も台湾と中華人民共和国の関係は東南アジアの大陸部にさまざまな影響を及ぼしています。

他方、雲南、ビルマ、タイの地域は交流の十字路でありまして、雲南の域内にはさまざまな森林資源がビルマから運ばれてきました。ビルマのモゴックではルビーが有名です。調査をしていると、そこで親族が掘りにいっていたという話を聞いたりしました。一部の人は今、ビルマで宝石商を営んでいます。ジャーナリストティックに言えば、このあたりはアヘンが生産されたが故に、そこを狙ってさまざまな勢力や西洋列強も侵略して資源を狙い、巨大な富を蓄積したことが伝えられています。このように、さまざまな交易活動が行なわれたことがよく知られています。

では、中国と東南アジアをつなぐ人の移動という点から、中国のムスリム、回族の人たちから見た場合の連続性というのはどのようなもののでしょうか。雲南にもあるものが、ビルマにもある。雲南にあるものがタイにもあるということで、たとえばモスクが、ビルマ、タイにつくられていくとか、最初、タイに住んでいなかったのに移動が始まって定住して結婚して、ムスリム・コミュニティがタイにもビルマにも出てきました。それを連続性ということが出来ます。その中で中国のムスリムの人たちの周辺にはインド系の人たちが暮らしていました。インド系、パキスタン系を

ふくめた南アジア系の人たちが布とか精肉を扱うという分業も起こっています。たとえば、この女性は南アジア系の人で、布を売っています。陸路を通して中国と東南アジアの移動がつながってきたことの一例を示しています。さて、タイではどのような宗教、文化空間があるのでしょうか。たとえばモスクに行くと、さまざまな儀礼があり、たとえば、断食明けの人たちが集まり、モスクが中心になるコミュニティがあること。中国語、タイ語を使って宗教文化がつけられていること、食文化だったら中国の雲南で食べていたものを儀礼の時に食べることも見られますし、今ではチェンマイという観光地に中国系のムスリムの人たちがレストランを開いていますのでハラール・ストリートという感じにもなっています。イスラーム学校も建設されているので、そこにはタイのムスリムも来る、ビルマからのムスリムも学びにきている。雲南から移動してきた人たちがさまざまな宗教文化空間をチェンマイで形成していることがわかると思います。

3. パンロン人の経験—清朝からの弾圧を逃れてビルマへ、さらなる戦乱の中で

そういう連続性もありますが、一方で断絶の歴史を経験してきた人たちもいます。清朝による弾圧が厳しかったということで、一つは中国の王朝との関係、もう一つは帝国列強の侵略、国共内戦、冷戦という、いくつかの外部からの政治経済的影響が人々の暮らしに亀裂を入れました。タイで調査する中でさまざまな外的

な影響が自分の暮らしにどういうことがあったのかを聞きました。これはタイに中国のムスリムが移住してきた流れを示している図です。最も大きな影響は、杜文秀という中国雲南省のムスリムのリーダーだった人が決起して清朝に反旗を翻し、杜文秀の乱ともいわれています。その反乱に失敗したことで19世紀末から避難民がビルマの山地の方に逃れてコミュニティがつくられました。この杜文秀の関係者が避難民した場所、パンロンというところに反旗を翻した人たちがつくった集落があります。そこは、すでにイギリスの植民地下にあったと同時に山岳の民族たちも住んでいました。さらにここは日本軍がビルマに北上した時にパンロンの村を焼き払ったという場所でもあります。私が日本から来たということで、それを知ってパンロンの人々が私に「自分の経験を日本人にぜひ伝えてほしい」というのが最初のパンロン人に関する調査のきっかけでした。日本軍の影響と、さらには中国軍の遠征軍が1940年代に雲南からパンロンに南下したため、パンロンは戦場になりました。その結果、パンロンからまた避難民が発生してタイ、ビルマへ、中には中国に逆戻りする人もいました。さらに追い打ちをかけるように故郷の雲南で1940年代に内戦が再発すると雲南のムスリムの中には避難民として、ビルマ、タイに逃げる人もでてきました。新中国が成立した1949年以降でも、雲南のムスリムの避難民はタイへ陸路を通じて逃げてきました。

4. 20世紀後半では、国共内戦の余波がタイにも影響する

そういう経験をした雲南のムスリムたちをタイというところで私は出会ったわけです。人々はどういう現実に直面したかを、お話ししたいと思います。一つはムスリムだったのですが、タイに移住後はコミュニティがバラバラになったことから、宗教的にはイスラームが希薄化していった。宗教よりも冷戦下における戦争の大義に合わせ、自分が生きる方法を模索せざるをえなかったのです。当然ながら家族もバラバラになっていき、家族形態は多様化していきます。特に内戦、中国の共産党と国民党の争いで反共政策とか冷戦の考え方が、1950年代以後にタイやビルマのあたりにも影響しました。台湾に逃げた国民党軍はよく知られていますが、タイにも南下してきて国民党軍は、「難民」的な環境での生活を強いられました。台湾の方に逃げた国民党軍は中華民国、すなわち、国民党軍に貢献する人物を讃えていくわけですが、その関連でタイには「義民文史館」というのがあります。中華民国の「正義」の戦いに貢献した人物を記録し、冷戦に貢献した人たちの物語が展示されている博物館です。この戦いとは、中国に大陸反抗、中国大陸を、もう一度、中華民国が取り戻すための戦いのことです。吹き荒れる「正義」の戦いの中で、中国やビルマから避難してきたムスリムの個々人はどのように生きるのかが問われてきたわけです。

国民党の人たちは中華民国ということで、ある意味、軍の影響

力の中で生きていくわけですが、さまざまな人が、そこから弾き出されながら生きてきたことになります。弾きだされてきた人たちの声を紹介したいと思います。軍人でもなかった雲南のムスリムの人たちの事例を紹介します。ある人はこのように語りました。で「イスラームのおかげで自分たちは戦乱から逃げることができ、仕事に成功した。自分はイスラームのために生きよう」と決意したというのです。自分たちがタイの中でどう生きるか、モスクをどう建設するか、モスクに寄付をすることなどを通して、さまざまな形で自分の生存を獲得していくのです。私がタイで出会った馬さんもこうした思いを持ったムスリムの中の一人です。

5. 馬さんの越境と故郷—どう生きたか、何を選びとったか

馬さんは度重なる戦争の中で、どう生きてきたか。馬さんは、さきほど述べた杜文秀という清朝に反旗を翻したムスリムの関係者の末裔でして、末裔が逃げてきたビルマの北部のパンロンというところで生まれました。しかし第二次世界大戦時、日本軍がこの地に侵攻してきたので、この人は10代の時にこの村を離れます。そこから西側のタンヤンに移動し、移動したのも束の間、繰り返し移動する中で、中国から国共内戦でたくさんの人たちが流れてくる。その人の一人と結婚するわけです。そこでさらにタイに移動します。しかしタイで落ち着いたのもつかの間、つぎに中国大陸を攻め込もうという中華民国・台湾や、タイの反共政策が

絡み合い、もうタイには住めないということでラオスに逃げます。ようやく1975年ごろからタイのチェンマイに定住します。彼女から「日本から来たあなたには、ぜひパンロン人の歴史を伝えてほしい」といわれました。

12歳の時、日本軍がパンロンに来て、中国に行ったり、雲南省に戻ったり、国共内戦でビルマに戻り、結婚をする。戦乱の中で自分のネットワークである雲南にいる親族を頼ったり、中国から来たムスリムの人と結婚することで自分の中で何とか生き延びてきたわけです。こういう人が自分の歴史を、どのように考え、どう生きてきたか。彼女は、戦争が個人の生き方に与えるたことを語ってくれました。馬さんのお兄さんは実はビルマにいた時に中国の遠征軍に殺されました。自分の兄が当時の中華民国の軍隊によって殺されたことを彼女はあまり語りたがりませんでした。タイで暮らし始めてからも、馬さんは、吹き荒れる中華民国による中華人民共和国奪還という大きなイデオロギーとは、できるだけ距離を置きたいという生き方を貫きました。越境という大きな歴史の記録と重なりあう中で、自分自身はイスラームを中心にしたつながりを大事にしてきたこと。それはイスラームの子どもたちを守ろうと、このパンロンの出自をもつ子供たちに毎年、奨学金をあげたりしています。例えば、この写真に出てくる人はパンロン出身の人ですが、この人にも寄付をする。慈善活動として儀礼の時に、お食事に招待するとか、自分自身の帰属を「タイ人」とか「中華民国に対する正義」ではなく、イスラーム文化につながっていくことで表現してきました。それと同時に「パンロン人」

という自分のルーツを確認するためにも宗教儀礼を行なってきたということがあります。

いろいろタイで調査をしていくうちに、パンロン人について調べたり話を聞いていくと、「自分はパンロン人だ」という柳さんという人と出会いました。この人は、先程の馬さんと親戚であることがわかり、この柳さんのお母さんは1937年、パンロンで生まれて両親もパンロン人でした。5歳の時、日本軍が侵略してきて、中国からの遠征軍も侵略してきて。さらにその村の中で混乱を加速させるように周辺の少数民族の攻撃を受けて転々とお母さんは生きてきた。柳さんの母はパンロンから逃げました。その後、結婚して柳さんが生まれ、柳さんはビルマのモントンというところでイスラーム学校に行きます。当時、寄宿舎で、タダで勉強ができるということで、お母さんが子どもを育てるのに大変だったのでむりやり行かされたそうです。そこで培ったイスラーム教育のおかげで、柳さんは今はモスクでイマームになっています。その後、チェンラーイに移動し、副業としてラーメンをつくったり、いまではライセンスをもって鍼灸医としてチェンラーイで開業しています。生計を維持するためにタイで鍼灸の免許をとりましたが、タイでの自身の帰属のあり方を模索する中で、柳さんはイスラームへの信仰を維持し、さらに発揚させていくわけです。同時に中国との往来が、改革開放以後、活発になってきて中国でも鍼灸の免許をとって、タイでは鍼灸を生業としてやっているのは珍しいのですが、そういう新しい選択をしていくことになりました。

6. 歴史の記憶を共有する

これはタウンジーという場所で、ミャンマーのフィールドワーク調査で出会ったパンロン人です。1955年生まれで、ご両親は雲南生まれ。パンロンの人たちは親戚が結構、台湾にいたり、タイにいたり、戦乱の越境で複数の地に住んでいるのが現在の状況です。この人たちのグループで興味深いのは近年、自分たちの歴史をまとめた冊子を中国語で出したことです。「自分たちのルーツは元の時代に始まるムスリムのルーツである」と。この冊子では、パンロン人のルーツに言及していきまして、自分たちは由緒ある雲南のムスリム軍人の末裔である等、自分たちのルーツが雲南のどこにあるかということを綿々と記録しています。ビルマで発行し、それがタイの人たちにも現在、共有されています。これは、馬さんのおじいさんの写真です。パンロン村でのトップのリーダーでした。この写真を私に見せてくれて、「自分のおじいさんはビルマで活躍していた」と語りました。このパンロンの村について語られた物語の内容についてですが、例えば、パンロンの村がどういうふうに繁栄してきたかとか、自分たちはビルマの山地に住む現地の人たちとどんな民族的な関係をもったのだとか、日中戦争が始まってパンロンはどんなふうになったのかについて記されています。それを、現在、ビルマやタイに住むパンロン人は歴史の記憶を冊子媒体を通して共有し始めているのです。また、パンロン人は、ビルマの植民地下においてイギリス、フランスと、どんな関係をもったのか。そこではイスラームの学びがどのように展

開されたのかについての物語も示されています。このようにいまはすでになくなってしまった過去のパンロン村の物語を共有する動きが出ています。

今、中国ではパンロンへの移民が始まったきっかけとなった雲南のムスリム、回族のリーダーである杜文秀、清朝に反旗を翻した人への再評価の動きも起こっています。中国の回族の人たちは、清朝によって虐殺された自分たちの同胞について、彼らの清朝への抵抗は不当ではなかったと、研究者を含めて再評価する活動をしているのです。同時に中国大陸ではムスリムとしての宗教意識意識の台頭、別の形でイスラーム復興が起こってきています。

7. まとめ

まとめに入ります。越境する移民にとって、コミュニティをどう構築するかという問題は、故郷や出身地を離れ、あたらしい土地に定着するまでのプロセスのなかで極めて重要でありました。現在、タイ北部に住んでいる雲南ムスリムの移住者たちについては、現代の文脈においては、彼らの越境が国際的には冷戦や中国の内戦に起因しているため、そうしたマクロな政治的環境のなかで、国民党、すなわちいまの台湾である中華民国の歴史観に依拠してそのコミュニティの歴史が語られてきました。実際、国民党軍隊によって形成された村々はタイ北部にありまして、いまも形を変えて存続しています。その影響下で、自分たちの越境の歴史の記憶を、国民党軍との関係性の中で受容することをできた人も

いますが、馬さんのように、お兄さんが国民党軍に殺されてしまった場合、そういう語り口では全く語られない歴史観をもっていることがわかりました。馬さんがとった立場は、自分でできること、家族とのつながり、自分自身がつながることができるイスラームを軸にコミュニティとのつながりを共同して構築していくということでした。同時に戦争によってなくなった故郷、戦争に関するイデオロギーの中で、もう一度、過去の自分の「故郷の物語」、すなわちパンロンの村の記憶を物語として共有しようとすることでした。それがパンロン人という意識の表れです。共有することのみならず、イスラームの人たちの実践、儀礼の中で、つながりを、もう一度、取り直そうとしたことです。こういうことから越境者をひとかたまりで見てしまうのではなく、歴史的な経験の中で「帰属」が変化すると同時に、イスラームのウンマも、彼らが、その時代の流れの中で向き合う中で、イスラームの中身もコンテンツが違ってくるといえます。中華人民共和国では回族としての政治的、民族的な台頭を求める動きがありますが、タイに住むパンロン人は、タイの中で政治的な力をもとうというよりも、自分たちの帰属を多様化させながら、いかに生きていくかということに、関心をもちながら生活をしている。イスラーム的な「故郷」を異境で構築していくということであったと思います。ありがとうございました。

